

	音楽研究会 部会記録			
日時	平成30年7月4日(水) 15:30～16:45			
部会名	鑑賞部会		主任	山田 万里(大岡小)
参加数	11名	司会	澤 由美(日吉南小)	記録 山本 紗矢香(大岡小)

鑑賞部会テーマ

音楽のよさや面白さ、美しさを自ら感じ取り、聴き味わう鑑賞活動
～「聴き味わう」子どもの姿を目指して～

(研究内容) 基礎研究Ⅱ 基礎研究Ⅰを受けて

『今 改めて 鑑賞について考える』

共同研究者：つづきの丘小学校長 館 雅之先生

はじめに

鑑賞の授業はなぜ必要かについて、参加者が述べ、各々の「考え、とらえ」を確認した。

実際に曲を聴き、3つのグループ(音楽の①印象 ②つくり ③自由)で話し合った。

→自分たちの「考えやとらえ」と実際の「鑑賞」を照らし合わせた。

1 鑑賞とは

○ 客観的側面と主観的側面

◆「味わう」という主観性が特徴

◆ 音楽鑑賞には、様々な場面がある。

- ・「聴く」ことを知覚
- ・音楽を理解(様々な知識が必要)
- ・抽象的なものに対しての行為であるため、個々によって感じ方が異なる

○ 鑑賞指導

「鑑賞のために指導する」「児童が鑑賞できるように指導する」

教師はただ、児童自らの享受に都合のよい準備をしてやれるだけである。

(濱野 政雄『新版 音楽教育学概説』)

○ 鑑賞教育の特徴

「抽象的なものにふれたときの感じ取りの教育」

○ 音楽鑑賞と音楽鑑賞教育

・音楽鑑賞 個人的な行為 主観の世界

・音楽鑑賞教育 学校教育の場では、客観的行為でなければならない。

授業を受けた全員が最終的には「わかり得る」「感じ得る」という種類のものではない。

(渡邊 學而『音楽鑑賞の指導法』)

2 知識のとらえ

○ 知識観の転換

・新しい知識が既得の知識と関係づけられて構造化されたり、知識と経験が結びつくことで身体化されたりして、様々な場面で活用できるものとして獲得される、いわゆる概念的な知識を含むものである。

(中教審 芸術WG 資料より)

・機械的な暗記とは異なる「生きて働く知識」

○ 教科目標のとらえ

この曲はA－B－Aという形（三部形式）である。→音楽活動を通さなくても得られる知識

AからBの部分において「ゆったりとした感じから、にぎやかな感じに変わったのは、箏と尺八が会話をするような音楽になっているからだ」

→感じ取った音楽の雰囲気や表情と、音楽的な特徴などとの関わりについて捉え、理解している。

→生きて働く知識



知識に関する教科の目標

「曲想と音楽の構造などとの関わりについて気付く／理解する」

・学習指導要領 音楽科の目標及び内容について

改訂（平成29年告示）の文言について、現行（平成20年告示）と照らし合わせ、整理する。

学年間の系統性に着目して文言を整理する。

終わりに

「鑑賞とは」「知識のとらえ」について、鑑賞部会として改めて考えることから、研究を進めていくとよいのではないかな。